# トルコ語における yes-no 疑問文の構造

藤家洋昭　Toplamaoğlu A. Kâmil
大阪外国語大学
huziie@osaka-gaidai.ac.jp

## １．はじめに

トルコ語は、形態的には膠着語で統語的には主辞が右側に来ることなど、日本語とよく似た特徴を持つ言語である。トルコ語におけるいわゆる yes-no 疑問文は、日本語と同じく、疑問を示す形式を基本的には文末におくことによって表される。yes-no 疑問文については、伝統的なトルコ語学では興味の中心になく、これまでほとんど議論されてこなかったということができる。また、最近のトルコ言語学の分野においても、例外[1]を除けばほとんど分析されていないといえる。そのような状況の中で本研究は、トルコ語の yes-no 疑問文をとりあげ、その構造を主辞駆動句構造文法[2][3]の枠組みで分析記述することを目的とする。論文の構成は次のとおりである。第２章でトルコ語 yes-no 疑問文のさまざまなデータを観察し、一般化する。第３章で疑問を示す形式である mi の性質を議論する。第４章では、疑問を示す mi が文末に来ないケースの分析を行う。第５章はまとめと今後の課題である。

## ２．基本データ

ここでは、トルコ語における yes-no 疑問文のデータを観察する。本研究で yes-no 疑問文と呼ぶのは、真偽を問い、質問された聞き手が ”Evet”「はい」または ”Hayır”「いいえ」で答えることができるような種類の疑問文である。

トルコ語の yes-no 疑問文は、基本的に文末に疑問を示す形式 mi を置くことによって表される。平叙文と yes-no 疑問文の基本例は次のとおりである。

平叙文：

(1)　Hasan　geldi.
　　ハサン　来た　　「ハサンが来た」

yes-no 疑問文：

(2)　Hasan　geldi　mi?
　　ハサン　来た　か　　「ハサンは来たか。」

以下が yes-no 疑問文のさらなる例である。

(3) a. Hasan　dün　geldi　mi?
　　ハサン　昨日　来た　か　「ハサンは昨日来たか。」

　b. *Hasan　mı dün　mü geldi　mi?
　　ハサン　か　昨日　か　来た　か

(4) a. Siz　yarın gelecek misiniz?
　　あなた　明日　来る　か・付（二複）「あなたは明日来ますか。」

　b.*Siz　yarın　geleceksiniz　mi?
　　あなた　明日　来る・付（二複）か

(5) a. Hasan　dün　geldi　mi?
　　ハサン　昨日　来た　か　「ハサンは昨日来たか。」

　b. Hasan　dün　mü　geldi?
　　ハサン　昨日　か　来た　「ハサンが

来たのは昨日か。」

c. Hasan　mı dün　geldi?

ハサン　か　昨日　来た　「ハサンが昨日来たか。」

以上の例から、トルコ語の yes-no 疑問文を次のように一般化できる。

・疑問の形式として mi を用いる。

・mi は一文につき一つしか現れない。

・mi は基本的に文末に現れるが、以下に示す場合は文末ではない。

・人称を示す付属語の後には現れない。

・特に尋ねたい句がある場合はその直後におかれる。

３．疑問を表す mi の性質

トルコ語は、ほとんどの場合、主辞が右側に来る言語である。

例：

主語－動詞

(6) a. Hasan　güldü.

ハサン　笑った（H）　「ハサンが笑った。」

補語－動詞

b. kitap okudu

本　読んだ（H）　「本を読んだ」

形容詞－名詞

c. yüksek dağ

高い　山（H）　「高い山」

副詞－動詞

d. yavaş　yürüyor

ゆっくり　歩く（H）　「ゆっくり歩く」

このように、主辞が右側に来る言語であることからすると、疑問文において文末に現れる、疑問を示す形式 mi（以下、単に mi と記す）も主辞であると考えるのが自然であろう。ここでは、mi の性質について、特に主辞かどうか検討する。

mi が主辞であるとすると、考えられるのは、S を指定部にとるあるいは VP を補語にとるとする分析である。しかしながらこの分析にはかなり無理なところがある。次の例を見られたい。(7)は過去形 (-di)、(8)は未来形 (-ecek) とともに mi が現れた例である。

(7) a. Sen　onu　gördün　mü?

君（二単）彼を　見た（二単）か

b. *Sen　onu　gördü　mün?

君（二単）彼を　見た　か（二単）

(8) a. Sen　onu　görecek misin?

君（二単）彼を　見る　か（二単）

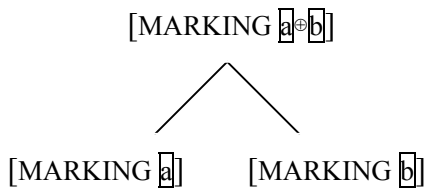
b. *Sen　onu　göreceksin　mi?

君（二単）彼を　見る（二単）か

(7)の例では、主語 sen を決めているのは、mi(mü)ではなく、gördün であると考えるのが自然である。一方、(8)の例では、主語 sen を決めているのは、-sin であると考えることができる。そうすると、mi は、(7)の例では、S を指定部、(8)の例では VP を補語にとっていることになるが、それはどういうことか。両者における mi が同じものだとすると、このような違いをいかに考えればいいかという問題が生じる。もちろん、過去形(-di)の場合は S を指定部、未来形(-ecek)の場合は VP を補語にとる...というように、個別に指定するやり方も可能かと思われるが、それでは著しく一般性を欠く分析であるといわざるを得ない。このようなことから、本研究では mi が主辞であるという分析を採用しない。では主辞でなければ何であるか。mi はマーカーであるというのが本研究の分析である。このため MARKING

素性[2]を導入し、あわせて次のような、マーカー原理と、主辞・マーカー規則を導入する。

マーカー原理：




主辞・マーカー規則：

$$\begin{bmatrix} \text{HEAD } \boxed{1} \\ \text{MARKING } \boxed{2} \end{bmatrix} \rightarrow$$

$$\text{H}\begin{bmatrix} \text{HEAD } \boxed{1} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \text{MARKING } \boxed{2} \end{bmatrix}$$

これにより、MARKING 素性は HEAD 素性と同じように上に伝わる。

ここまでをまとめると、トルコ語の文は、平叙文であれ疑問文であれ、VP が主辞であり、mi は主辞ではなくマーカーである、ということになる。このことにより、疑問文を語彙規則によりシンプルに記述することができる。なお、mi は、M で表されている。

疑問語彙規則

$$\left\langle \boxed{2}, \begin{bmatrix} \textit{word} \\ \text{SYN [HEAD [}\textit{verb}\text{]]} \\ \text{ARG-ST } \langle \boxed{1} \rangle \oplus \boxed{a} \\ \text{SEM [MODE prop]} \end{bmatrix} \right\rangle \Rightarrow$$

$$\left\langle \boxed{2}, \begin{bmatrix} \text{SYN [HEAD [}\textit{verb}\text{]]} \\ \text{ARG-ST } \langle \boxed{1} \rangle \oplus \boxed{a} \oplus \langle [\text{M}] \rangle \\ \text{SEM [MODE ques]} \end{bmatrix} \right\rangle$$

この語い規則により、mi が現れることが得られる。

## ４．文末に来ない mi

トルコ語における疑問を示す形式 mi は、基本的には文末に位置するが、特に尋ねたいものがある場合、その語の直後に位置することができる（(5)a.-c.参照）。これは、日本語における倒置文と比べることができる。例「太郎ですか東京に行ったのは。」しかしながら、決定的に違う点がある。それは、文型である。日本語では、「か」は、あくまでも文末に現れる。それ以外の場合は、終止形を用いた通常の文型とは異なる。例「太郎はきのう東京へ行った。」「太郎か、きのう東京へ行ったのは。」「きのうか、太郎が東京へ行ったのは。」「東京か、きのう太郎が行ったのは。」「*太郎か、きのう東京へ行った。」「*きのうか、太郎が東京へ行った。」「*東京か、太郎がきのう行った。」これらに対して、トルコ語の mi が文末以外の要素の後続した文は、mi の位置を除いて基本文と全く同じ形をとる（(5) a-c 参照）。すなわち、これらからわかることは、mi が文中のどの要素に後続するかということが異なるたけで、他は通常の疑問文と同じであるということである。この点で日本語の倒置文とは異なる。本章での仕事は、文末に現れない mi をいかに記述するかである。前章の分析だけでは、動詞の直後に位置する mi しか記述することができない。何らかの方法による拡張が必要である。本章では、これを、GAP 素性[3]を用いることによって拡張する。しかしここで問題が生じる。通常の方法では、直接の補語しか扱

えないのである。上の例で明らかなとおり、mi は直接の補語ではない。そこで工夫を要する。本研究が採用したアプローチは、 文法規則の併用である。これにより文法規則が増えることになり好ましいことではないが、yes-no 疑問文はきわめて一般的なものであるので文法規則を増やすことに大きな問題はないと考えられる。具体的には次の文法規則になる。

疑問マーカー・空所規則

$$\begin{bmatrix} \textit{phrase} \\ \text{MARKING mi} \end{bmatrix} \rightarrow$$

$$\begin{bmatrix} \textit{phrase} \\ \text{MARKING mi} \end{bmatrix} \quad \text{H} \quad \begin{bmatrix} \textit{phrase} \\ \text{GAP <mi>} \end{bmatrix}$$

これにより、GAP<mi>を持つ句と mi を伴う句が合わさって文法的であることが保証される。また同時にこの規則は線形順序も規定しているので、GAP<mi>を持つ句の後に MARKING mi を持つ句が生起することを許さず、結果として人称を表す付属語の後に mi が来ることを排除する。

あなたは明日来ますか。」

(9 (= (4)b.))

*Siz yarın geleceksiniz mi?

あなた 明日 来る・付（二複）か

また、この規則とマーカー原理の相互作用により、mi が複数現れる文も排除する。

(10.)

b.*Siz mi yarın mı geleceksiniz?

あなた か 明日 か 来る・付（二複）

５．おわりに

トルコ語の yes-no 疑問文を分析記述した。

本研究で明らかにしたのは次の点である。疑問の mi は主辞ではなくマーカーであること。通常の位置以外に現れる mi は GAP 素性と文法規則によって記述できることである。

が、もちろんこれでトルコ語 yes-no 疑問文の全貌が明らかになったわけではない。残る問題の一つとして、（トルコ語の）de「も」bile「さえ」等のような、日本語の副助詞あるいは係助詞に相当する自立性の低い形式と mi との共起関係がある。今後の課題としてそれらを分析する必要がある。

略語一覧

二：二人称　単：単数　複：複数

付：付属語　H：主辞

参考文献

[1] 吉村大樹．トルコ語の mi に関する一考察．日本言語学会第 125 回大会予稿集．日本言語学会，2002.

[2] C. J. Pollard and I. A. Sag. *Head-Driven Phrase Structure Grammar.* The University of Chicago Press, 1994.

[3] I. A. Sag and T. Wasow. *Syntactic Theory: A Formal Introduction*, Vol. 92 of CSLI Lecture Notes Series. CSLI Publications, Stanford, California, 1999.